

「みこころを求めて生きる」

I サムエル記 24:1-7

【1】エン・ゲディの洞穴で

ダビデとサウルは、神の配慮によって「仕切りの岩山」で隔てられ、二人が対面することを免れた。ダビデは荒野をさまよいながらサウルから逃げていたが、「神はダビデをサウルの手に渡されなかった」(23:14)。

しかし、エン・ゲディの洞穴においてこの状況が逆転したかのように見える。ダビデの部下はダビデに対して、「今日こそ、主があなた様に、『見よ、わたしはあなたの敵をあなたの手に渡す。彼をあなたの良いと思うようにせよ』と言われた、その日です。」と語った。確かに部下のこのことばは、そのとおりに思えることばでもある。この状況そのものが絶好のチャンスでもあり、不思議な出来事でもあった。

しかし、問題はこの状況は神からのものであると思えるが、果たしてダビデがサウルに手を下す時であるのかということである。このことが神のみこころでなかったとしたら、これはダビデにとって神の試みの時でもあったのである。

【2】神の主権を認めること

ダビデはこの状況の中でサウルに手を下すことはせず、上着の裾を切り取るにとどめた。それは、後にサウルに殺意のないことを示すためでもあったであろう。しかし、ダビデはこのことにさえも心を痛めた(5)。

どうしてダビデはこれほどまでにサウルに対する対応を慎重に考えたのであろうか。それは6節のことばに現されている。つまり、サウルは神によって立てられた者である。それがいかな

る人物であったとしてもこの者を選んだのは神である。洞穴の中でサウルに対峙しながらダビデは神の存在を覚えていたのである。ダビデにとってサウルとは、「主なる神」を意識させる存在であったのである。この時ダビデはサウルを意識してではなくて神を意識していた。この問題は、ダビデとサウルの問題ではなく、ダビデと主との問題であった。

【3】みこころを求めて生きる

神のみこころを求めて生きる時、私たちは「はい」や「いいえ」といった神の答えを得られることを考えるかもしれない。しかし、御子の贖いの御業が完成した今、神からの直接的指示は終わり、完全な啓示とともに聖霊が与えられているのである。

ダビデも必ずしもすべての行動に神からの直接的指示があったわけではない。彼が意識していたのは、神の主権と神の約束であった。ダビデは状況や部下のことばではなく、神の主権的支配を意識し、その神がサウルに対してなしていたことを考えたのである。ダビデは状況の背後におられる神を意識し、物事を考えたのである(10節)。

この状況は神が与えられたことであるが、手を下してよいかどうかは委ねられていないと考えた。このことは、神の前における神に従う信仰の問題であった。事のはじめから主はサウルとダビデの間に介在し、導いておられることを確信していたのである。12節はダビデの神への信仰告白でもある。

神のみこころを求めて生きるとは、いかに主を愛して生きるかという信仰のチャレンジでもある。困難な現実と向き合いながらも、最善を尽くして主を信頼して歩もう。